

# 聖所愛戒に就いて

——大乘戒の歸結として——

西 本 龍 山

## 一、語の出據

瑜伽論卷十四本地分中聞所成地(來一六〇、右一七)、又爲顯說無倒牟尼建立三種眞實牟尼(即是聖所愛戒所攝身語二業及無漏心)。

瑜伽論卷二十九本地分中聲聞地(來二四〇、左八)、問何故此名聖所愛戒、答以下諸聖者賢善正至長時愛樂欣慕悅意……由彼長夜於此尸羅深心愛樂欣慕悅意、故獲得時名聖所愛、獲得如是聖愛戒已終不<sub>三</sub>正知而說<sub>三</sub>妄語……即由如是聖所愛戒增上力故於修道時乃至所有語業身業養命事轉亦得名爲正語業命。

瑜伽論卷七十一攝決擇分中聲聞地(來四四二、右七)、問戒現觀何自性。答聖所愛身語業爲自性、或此俱行菩提分法爲自性。瑜伽論卷八十二攝釋分(來五八、右五)、又世尊說戒有無量種、謂事善戒、苾芻戒、近住戒、靜慮戒、等持戒、聖所愛戒、如是等戒今依何說住學勝利。答依苾芻戒、由最勝故。(住學勝利とは増上戒學に於て勝功德を見て住するの義なり。勝功德とは僧を攝受する等の十勝利なり)

瑜伽論卷八十三攝異門分(來五一、左一五)、至誠法者謂諦現觀增上力故獲得證淨於佛法僧及自所得聖愛戒以正信行如

聖所愛戒に就いて

實至誠故。

瑜伽論卷九十八攝事分中契經事菩提分法擇攝(來五・九二)、復次於性罪處能遠離故、當知是名淨戒圓滿、於能密護諸根門等攝受淨戒所有善法無間受持相續轉故、當知是名善法圓滿、於遮罪處能遠離故、當知是名別解脫圓滿、又依聖所愛戒、若依蘊等五種善巧、及依別解脫律儀受持世俗所有禁戒、隨其次第一應知淨戒圓滿等第二門差別。……於沙門性善隨順故說名隨順、趣聖所愛澄清性故名順澄清……………。

瑜伽論卷九十九攝事分中調伏事總擇攝(來五・九八)、聖所愛戒差別分別如攝異門、應知其相。  
中阿含經卷六十阿那律陀經第八(大正一・八)、尊者阿那律陀答曰、諸賢、若比丘見質直及得聖愛戒者、是謂比丘不煩熱死・不煩熱命終。

以上は聖所愛戒なる語についての余の見たる典據である。尙ほ此語を反顯する文として瑜伽論卷九十四攝事分中契經事緣起食諦界擇攝(來五・六七)に「又爲賢聖之所棄捨、於其內心恒不寂靜、外身語意猥雜而住、勃惡貪婪強口憍傲、於如是事不見過罪、多所毀犯不如法悔、由數習故漸次毀犯一切尸羅、當知是名下依止所有增上戒學一起諸邪行……………」とあるのが注意せらるゝ。

## 二、語の意義

遁倫の瑜伽論記卷十四(續藏七五・五)に問何故此名聖所愛戒等者、此辨正語業命得名聖所愛戒……………此無漏道共戒名不作律儀、卽由如是聖所愛戒力故於修道時所有有漏語業身業養命事業皆得名爲正語業命とある故に、

聖所愛戒とは無漏の正語・正業・正命に名づけると共に、無漏戒力に由りて有漏時に於ける語・業・命をも正語・正業・正命と名づけうるとの意味である。倫記の其他の釋に於ては、「戒現觀とは即ち無漏道共七支戒を取りて性と爲す」(續七六・三・二六六左下)とか、「聖所愛戒とは道共戒なり」(續七六・四・三四五左下)とあるのみである。この聖所愛戒なるものを有漏無漏に通ずると釋せる事は瑜伽論の指示に依るものである。即ち論第二十九卷(前)に「是の如きの聖所愛戒増上方に由りての故に、修道時に於ても乃至あらゆる語業・身業・養命事もうたゝ亦名づけて正語・(正)業・(正)命と爲すを得ん」とあるを承けたのである。而して瑜伽論の此記は智度論の所明に相應する。智度論第二十二(大正二五・二二六中二〇)に問曰無漏戒應爲智者所讚有漏戒何以讚。答曰有漏戒似無漏隨無漏同行因緣是故智者合讚……と記し、更に巧妙なる譬喩を設けて「賊中より人あり叛き來りて我に歸するが如し。彼は是れ賊なりと雖今來りて我に向へるなれば我れ當に之を内るべく、以て賊を破すべければ何ぞ念ぜざるべけんや。諸の煩惱の賊は三界の城中に在りて住するも有漏戒善根若しは煖法・頂法・忍法・世間第一法は餘の有漏法とは異なるが故に行者受用す。是の因緣を以ての故に諸の結使の賊を破して苦法忍無漏法財を得るなり。是を以ての故に智者所讚なり、是を念戒と名づく」と記してをる。

その無漏戒としての聖所愛戒について諸の聖者賢善の深心愛樂する相はいかなるものであるか。これについて瑜伽論卷二十九(來二・四〇左二〇)には「是の如きの聖愛戒を獲得し已るに、終に正知にして妄語を説くことをせず、終に故思もつて衆生命を害せず、終に故思もつて盜(不與而取)まず、終に故思もつて欲邪行を行ぜず、終に非法に衣服等を求むることをせず」と記して、不妄語と不殺生・不偷盜・不邪行と不邪命の三、即ち八聖道の正語・正業・正命の三を擧げてをる。文に正知とか故思とあるは「意識して」、「自覺して」、「故意に」の意である。その八聖道の中、正見・正思惟・正精

進の三は慧蘊の所攝であり、正念・正定の二は定蘊の所攝であり、而して今の正語・正業・正命の三は戒蘊の所攝である。或は正見・正思惟・正精進は毗婆舍那(觀)であり、正念・正定は奢摩他(止)であり、正語・正業・正命は止・觀の所依止と爲り時々之間に於て止・觀を修習して能く諸結を斷じて餘なく永斷する。而して止・觀(定・慧)の所依止としての戒蘊の内容としては、瑜伽論二十九卷(來二・四〇)(左三・四〇)に示されてゐる。

「……即由正見增上力・故起善思惟・發起種種々如法言論・是名正語。若如法求衣服・飲食・諸坐臥具・病緣醫藥供身什物、於追求時・若往若還正知而住、若觀若瞻若屈若伸、若持衣鉢及僧伽胝、若食若飲若噉若嘗正知而住、或於住時・於已追求衣服等事、若行若住若坐若臥、廣說乃至、若解勞睡正知而住、是名正業。如法追求服飲食乃至什物・遠離一切起邪命法・是名正命。」

瑜伽論に於て正語・正業・正命の戒蘊を斯くの如く配對して解せるは甚だ興味あり。瑜伽論第二十四卷(來二・一五)(左一・一七)には若觀若瞻若屈若伸等の基礎的本文を出だし、且つ大にそれが廣解を施してをる。しかし今文の如く正語・正業・正命に配對して釋してはゐない。論に引ける基礎的本文は次の如くである。

「云何名爲正知而住。謂如有<sup>スヤ</sup>一若往若還<sup>シハキ</sup>正知而住、若觀若瞻<sup>シハトガミ</sup>正知而住、若屈若伸<sup>シハバシ</sup>正知而住、持<sup>ツキセ</sup>僧伽胝及以衣鉢<sup>ビ</sup>正知而住、若食<sup>シハタベルニセ</sup>若飲<sup>ムニセ</sup>若噉<sup>カムニセ</sup>若嘗<sup>ナムルニセ</sup>正知而住、若行<sup>シハユクニセ</sup>若住<sup>トモルニセ</sup>若坐<sup>スルニセ</sup>若臥<sup>スルニセ</sup>正知而住、於<sup>テセ</sup>覺寤時正知而住、若語<sup>シハルニセ</sup>若默<sup>スルニセ</sup>正知而住、解勞睡時、正知而住。」

い、に正知而住とあるのは遊行經(大正一・一)(四上三)には具諸威儀とあるに相應し、巴利涅槃經(第二章第十三節)に sam-pajāna karī hoti とあるに相當し、「正しき自覺を爲してあれ」との意である。



### 三、聖所愛戒と智所讚戒

瑜伽論に出づる聖所愛戒なるものは上述の如くであるが、之に關聯して智度論に於ける智所讚戒又は智者所讚戒なるものを用意すべきである。智度論卷二十二(大正二五・二六上一五)に

「諸佛菩薩辟支佛及聲聞所讚戒、若行<sub>ニ</sub>是戒<sub>ニ</sub>用<sub>ニ</sub>是戒<sub>ニ</sub>是名<sub>ニ</sub>智所讚戒<sub>一</sub>。外道戒者牛戒鹿戒狗戒羅刹鬼戒啞戒聾戒、如是等戒、智所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>讚、唐苦無<sub>ニ</sub>善報<sub>一</sub>。復次智所讚者於<sub>ニ</sub>三種戒中<sub>一</sub>無漏戒、不<sub>レ</sub>破不<sub>レ</sub>壞依<sub>ニ</sub>此戒<sub>一</sub>得<sub>ニ</sub>實智慧<sub>一</sub>是聖所讚戒。無漏戒有<sub>ニ</sub>三種<sub>一</sub>如<sub>ニ</sub>佛說<sub>一</sub>正語・正業・正命、是三業義如<sub>ニ</sub>八聖道中說<sub>一</sub>、是中應<sub>ニ</sub>廣說<sub>一</sub>……」。

右の文の如く無漏戒即ち正語・正業・正命の三種戒に依りて實智慧を得るが故に是を智所讚戒と名づくとせるは瑜伽論の所明と相應する。それ故に瑜伽論の聖所愛戒は即ち智度論の智所讚戒であると考へ得るのである。智度論には次に問答を設けて曰ふ、「持戒は禪定の因縁、禪定は智慧の因縁であるから八聖道に於ても正語・正業・正命の三種戒を第一位に置くべきではないか。然るに八聖道の布列次第に於ては何故に慧の前に、戒を中に、定を後に置くのであるか」と。此問に答ふるに又巧妙なる譬喩を設けて曰ふ、「行路の法として先づ第一に眼を以て道を見、次いで行き、行く時精勤して驅策し、精勤して行く時常に導師の教ふる所を念じ、念じ已りて一心に道を進みて非道に順はざるが如く、八聖道の第一に正見を置くことは、先づ正智慧を以て五受衆(五蘊)につき皆苦なりと觀する、次に苦は愛等の諸結使の和合より生ず、愛等の諸結使の滅せるが涅槃であり、かくて等しく滅に到るの八分を觀するを正見と名づく。行者は是時、心に定んで世間は虛妄にして捨つべく、涅槃は實法にして取るべきを知る、この決定を正見と名づく。次

に是事を知見したとはいへ心力未だ大ならざれば未だ行を發すること能はず、更に思惟籌量して正見を發動して力を得しむるを正思惟と名づく。智慧既にして發らば言を以て宣べんと欲す、こゝに次第に正語・正業・正命となる、これ戒行時である。戒行時に精進して懈らず、以て色無色定の愉悅に住まらしめざる、是を正方便(正精進)と名づく。是の正見を用つて四諦を觀じて常に念じて忘れず、一切の煩惱は是れ賊にして捨すべく、正見等は是れ我が眞伴なれば應に隨へしむべしと念ず、是を正念と名づく。かくて四諦の中に於て心を攝して散ぜず、色無色定中に向はしめずして一心に涅槃に向ふ、是を正定と名づく。かくて初に善有漏を得、次第増進して初中後心に無漏心中に入り、疾く一心中に具して前後分別次第あることなく、正見は正思惟・正方便・正念・正定と相應し、三種戒(正語・正業・正命)は是の正見等の五分に隨うて行する。……是の如くして無漏戒は八聖道中に在り、亦智者所讚と爲す」と。こゝに三種戒は五分に隨うて行すとせることは、恰も瑜伽論に正語・正業・正命は止・觀の所依止と爲ると釋せると相一致する。且又、瑜伽論に於ては正語・正業・正命の戒蘊を「正知而住」によりて日常戒儀に順うて手近く是を釋してゐるが、智度論には空觀の論理を以て極めて深妙なる釋を爲してゐるのは注意すべきである。即ち智度論卷十九(大正二五・二〇五中九)に曰はく

「正語者、菩薩知下一切語皆從虛妄不實顛倒取相分別生、是時菩薩作是念、語中無語相、一切口業滅知諸語實相、是爲正語、是諸語皆無所從來、滅亦無所去、是菩薩行正語法、諸有所語皆住實相中、說、以是故諸經說、菩薩住正語中能作清淨口業、知一切語言眞相、雖有所說不墮邪語。正業者、菩薩知一切業邪相虛妄無實皆無作相、何以故、無有業可得定相。問曰、若一切業皆空、云何佛說布施等是善業、殺害等是不善業、餘事動作は無記業。答曰、諸業中尙無有、何況有三。何以故、如下行時已過則無去業、未至亦無去

業、現在去時亦無<sub>レ</sub>去業、以<sub>レ</sub>是故無<sub>レ</sub>去業。問曰、已過處則應<sub>レ</sub>無、未至處亦應<sub>レ</sub>無、今去處應<sub>レ</sub>是有<sub>レ</sub>去。答曰、今去處亦無<sub>レ</sub>去。何以故、除<sub>レ</sub>去業、今去處不可得。若除<sub>レ</sub>去業、今去處可得者、是中應<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>去。而不<sub>レ</sub>然、除<sub>レ</sub>今去處、則無<sub>レ</sub>去業、除<sub>レ</sub>去業、則無<sub>レ</sub>今去處。是相與共緣故、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>但言<sub>レ</sub>今去處有<sub>レ</sub>去。……問曰、不去者不去應<sub>レ</sub>爾、去者何故言<sub>レ</sub>不去。答曰、除<sub>レ</sub>去業、去者不可得、除<sub>レ</sub>去者、去業不可得、如<sub>レ</sub>是等一切業空、是名<sub>レ</sub>正業。諸菩薩入<sub>レ</sub>一切諸業平等、不<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>邪業<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>惡、不<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>正業<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>善、無<sub>レ</sub>所作<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>正業、不<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>邪業、是名<sub>レ</sub>實智慧、即是正業。復次諸法等中無<sub>レ</sub>正無<sub>レ</sub>邪、如<sub>レ</sub>實知<sub>レ</sub>諸業、如<sub>レ</sub>實知已不<sub>レ</sub>造不<sub>レ</sub>休、如<sub>レ</sub>是智人常有<sub>レ</sub>正業、無<sub>レ</sub>邪業、是名<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>菩薩正業。正命者、一切資生活命之具、悉正不<sub>レ</sub>邪、住<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>戲論智中、不<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>正命、不<sub>レ</sub>捨<sub>レ</sub>邪命、亦不<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>正法中、亦不<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>邪法中、常住<sub>レ</sub>清淨智中、入<sub>レ</sub>平等正命、不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>命、不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>非命、行<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>是實智慧、以<sub>レ</sub>是故名<sub>レ</sub>正命。

右の智度論の記は菩薩の正語・正業・正命を述べたるもの、これ取相戲論を排せる上戸羅・最勝戸羅を説けるもの、これ菩薩の八聖道解の一分ではあるが、智度論は八聖道のみならず三十七の道品全般に亘りて是の如く觀じ行くべきを示し、かくて聲聞僻支佛地を過えて菩薩位中に入り漸々に一切種智を成ずるを得ると教ふるのである。瑜伽論の正語・正業・正命の解も智度論の正語・正業・正命の解も共に菩薩無漏の戒相を説くのではあるが、一は聲聞地に相應せしめて是を説き、一は聲聞地を説く三十七品等の教説を執り來りて平等清淨の大乗空觀に融會せしめて説くの相違がある。而も兩者は永く離るべきものではない。夫故に智度論卷八十四(大正二五・六四九上二一)に「三十七品は二乘道、三十七品及六波羅蜜是菩薩道、菩薩應<sub>レ</sub>了<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>是諸道」との文は瑜伽系の教學にも相通ずといふべきである。

## 四、聖所愛戒と苾芻戒

先に述べたるが如く聖所愛戒は無漏戒であるが有漏戒にも通ずる。智所讚戒も亦有漏戒に通ずるのである。瑜伽論卷八十二(來五・八 右四)には「世尊が戒を説きたまふに無量種あり、謂はく事善戒、苾芻戒、近住戒、靜慮戒、等持戒、聖所愛戒なり。是の如き等の戒、今何に依りて住學勝利と説くや。答ふ、苾芻戒に依る、最勝に由りての故に」と説いてをる。靜慮戒・等持戒は定共戒であり、聖所愛戒は無漏戒即ち道共戒なる故に、事善戒・苾芻戒・近住戒等是有漏戒である。尤も有漏戒といふ時は定共戒をも攝するのであるが今暫らく除いて述べる。而して倫の記四十三卷(續七六 四・三)によるに「事善戒とは近事戒(優婆塞・優婆夷 夷の五戒)、比丘戒とは出家五衆戒(比丘・比丘尼・式叉摩那・沙彌・沙彌尼の諸戒)、近住戒とは一日一夜戒(八齋戒を持てる淨行 夷の五戒)なり、……苾芻戒に依る、最勝に由りての故にと言へるは、比丘戒は能く禪・無漏戒を生ずるが故に最勝と名づく」と釋してをる。此釋によりて、苾芻戒は能く定共戒及び無漏の聖所愛戒を出生する故に、有漏戒ではあるが最勝であるとの意である。即ち最勝とは亦聖所愛戒と云ひうるとの義である。これ智度論卷二十二(大正二五・二 二五下・三)には、「念戒とは、戒に二種あり、有漏戒と無漏戒となり。有漏に復二種あり、一には律儀戒、二には定共戒なり、行者初學に是の三種戒を念じ、三種を學し已りて但無漏戒を念ぜよ」といひ、而も次下に至りて有漏戒も智者讚す合きなり(述前)と述ぶると同趣である。而して瑜伽論(來五・八 右九)に於ては、「先づ苾芻尸羅に安住すべし、次いで應に如來の正法を聽受すべし」と勧め、更に次下(來五・八 右一五)には「問ふ、何の因縁の故に唯聲聞の爲にのみ住學勝利と説くや。答ふ、聲聞衆は是れ佛世尊の隨順修學の眞實子なるが故なり」と述べてをる。これ智度論卷三十

四(大正二五・三)に、「諸佛は多く聲聞を以て僧と爲して別の菩薩僧なし。彌勒菩薩・文殊菩薩等の如きも、釋迦文佛(一一下一〇)には別の菩薩僧なきが故に聲聞僧中に入りて次第して坐す」と云ひ、同卷四(大正二五・三)に、「諸の菩薩は二種、若しは出家若しも在家となり。在家菩薩は總説して優婆塞・優婆夷中に在り、出家菩薩は總じて比丘・比丘尼中に在り」と述べたるに相應せるは極めて注意すべきである。而してその苾芻尸羅に安住する相について、瑜伽論卷二十一(來二二)に「戒律儀謂彼如是正出家已安住具戒堅牢防護別解脫律儀、軌則所行皆圓滿、於微小罪見大怖畏受(右二二)に「戒律儀謂彼如是正出家已安住具戒堅牢防護別解脫律儀、軌則所行皆圓滿、於微小罪見大怖畏受學一切所有學處是名戒律儀」と釋し、論第二十二卷(來二六)には更に此文を釋して、安住具戒とは「受學する所の所有學處に於て身業を虧かず、語業を虧かず、無缺・無穿なるに名づく」と述べ、善能守護別解脫律儀とは「能く七衆所受の別解脫律儀を守護す、即ち此の律儀は衆差別する故に多律儀を成ずるも、今此義の中、唯苾芻律儀處に依りて善能守護別解脫律儀といふなり」と釋す。次に軌則所行皆圓滿の中、軌則圓滿と所行圓滿とを分ち、その軌則圓滿に就いて、<sup>(1)</sup>「威儀路に於て軌則を成就し、所行・所住・所坐・所臥に於て世間に譏毀せられず、賢良・正至・善士・諸同法者・諸持律者・諸學律者に呵責せられず。所作事に於て軌則を成就す、即ち衣服事・便利事・用水事・楊枝事・入聚落・行乞食事・受用事・盪鉢事・安置事・洗足事・爲敷・設臥具事、其他の所應作事に於て世間に譏毀せられず、賢良等に呵責せられず。諸善法加行處所に於て軌則を成就す、即ち正法に於て受持讀誦し、尊長に於て和敬業を修し參觀承事し、病者に於て慈悲心を起して殷重に供侍し、如法宣白の僧事に於て慈悲心に住して展轉與欲<sup>(如法僧事に不參加)</sup>の際はその意志を傳へて和合の意を示す」し、正法に於て請問・聽受・翹勤して墮るなく、諸の有智同梵行者に於てその身力を盡して敬事を修し、他の善品事に於て常に勤めて讚勵し、常に樂うて他の爲に正法を宣説し、靜室に入りては結跏趺坐して繫念思

惟し、是の如き等の諸餘の無量所修の善法に於て世間に譏毀せられず、賢良等に呵責せられず。斯の如きの諸の善品加行處所に於て軌則を成就して世間に隨順し世間を越えず、毘奈耶に隨順し毘奈耶を越えざるなり」。その所行圓滿に就いて、「諸苾芻には五種の非所行處あり、一に唱令家(倫の記には罪人を率ゐて巡歴しその罪狀を一般に)、二に姪女家、三に酤酒家、四に國王家、五に旃荼羅羯恥那家(倫の記に旃荼羅は根本執惡、羯恥那は根本執惡家に依住して更に極惡を作すもの、即ち屠兒を執惡、執惡の中更に刀杖を執るものを羯恥那と釋せり)なり。若し能く是の如きの如來所制の非所行處より遠離し、餘の無罪の所有行處に於て時を知りて行くを所行圓滿となす」と。(因みに此の五種非所行處は根本有部律の所説に相應して十誦律の五種には相應せず)。於て微小罪一見大怖畏とは、微小罪とは諸の小・隨小學處(Khuddakavagga)の譯、小々の戒即ち雜碎戒ににして、二百五十(瑜伽論卷八十五(來五・六左末)には、過一百五十學處とせるあり。倫記卷十一の釋に依るに樂學法を合して一と爲し、餘の一百五十に足して一百五十一あり)の所受の學處中にては遮戒と稱せらるゝもの、若し所犯あるには少しく功力を用ひて還淨せしむるを得る故に微小罪といふ。而もこの微小の犯罪に於て大怖畏を生ずとは、「我れ此の毀犯因縁によりて、復堪能することなく・得所未だ得ず・觸所未だ觸せず・證所未だ證せざることあること勿れ、我れ此の犯縁に由りて諸惡趣に近づき諸惡趣に往くことあること勿れ」と觀じ、或は「我れ當に自責すべし」、或は「大師・諸天・有智梵行者に法を以て呵責せられん」、「我れ此の犯縁に由りて諸の方維に遍く惡名・惡稱・惡頌をして遐邇(遠)に流布せしむる勿れ」と觀じ、現法・當來に毀犯の因に由りて非愛の果を生ぜんことに大怖畏を見て、「たとひ命難に會はんとも小・隨小の學處(制律)に於て故犯せず、若し誤犯することありとも速疾に如法に發露して還淨せしめん」と念するを於て微小罪一見大怖畏」と爲すと。

以上は瑜伽論聲聞地に出づる苾芻戒安住の眞の姿であり、且つ無漏の聖所愛戒が有漏にも通ずるの論據より、この

苾芻戒安住の姿が即ち有漏の聖所愛戒の姿なるを究明する爲に述べたのである。而して聲聞地に於ける記述なる故に菩薩の具戒相に非ず、菩薩の聖所愛戒に非ざるが如く考へられる。然し瑜伽論に於ける菩薩の戒相はその律儀戒に關する限り聲聞の苾芻別解脱戒と何等相違するものではない。たとひ瑜伽戒として四種他勝處法・四十三染違犯を説くとも、此等條々は攝善法戒・饒益有情戒としての相であり、佛が諸經中に機に隨うて散説したまひたるを集積せるものに外ならぬ。此等は菩薩が從他正受の別解脱苾芻戒を受け已りてより善清淨の求學意樂・菩提意樂・饒益一切有情意樂に由りて最極の尊重恭敬の念を生起して專精にして違犯すべからずとせるもの、それ故に條文として類聚しては

あるが決して律儀戒聚と見るべきではない。菩薩の律儀戒としては飽くまで聲聞の苾芻別解脱律儀なることに異變あるものではない。即ち、瑜伽論卷七十五、攝決擇分菩薩地(來四・五七)には「當に知るべし、菩薩毗奈耶に略して三聚あるを。初律儀戒毗奈耶聚は薄伽梵、諸の聲聞所化有情の爲に毗奈耶相を略説したまへるが如し。當に知るべし、即ち此れ毗奈耶聚なるを」と明かに記してをる。況んや菩薩の説法威儀として瑜伽論卷三十八、本地分中菩薩地(來二・

左)に曰はく、  
 「云何依ガリテ隨スルコトニ順ニ說ニ應ニ爲ベシト他說。謂諸菩薩應當安住如法威儀而爲他說。非不安住如法威儀。不爲下無病處高座者而說正法。不爲坐者立說正法。不應居後爲前行者而說正法。不爲覆頭(者)而說正法。如別解脱經廣說應知」。

此文は正しく根本有部戒本の衆學法第七六・七十四・七十七・七十九の四條に相當する條文であつて、聲聞の別解脱戒に於ける説法威儀をそのまゝ、取り來りて菩薩の説法威儀とせるの明證であることは特に注意すべきである。

## 五、智所讚戒と必芻戒

智所讚戒とは智度論に出づる語であり、瑜伽論の聖所愛戒なる語と同意義なることは既に述べたる所である。随つて此語が無漏戒の呼稱であると共に有漏戒にも通じて呼ばれうとする故に必芻戒これ智所讚戒なりと斷定しうるのである。この事は智度論卷二十二(大正二五・二二五下二四)念戒釋の下に明かである。

「復次是戒一切善法之所住處、譬如百穀藥木依地而生、持戒清淨能生長諸深禪定・實相智慧、亦是出家人之初門、一切出家人之所依仗、到涅槃之初因緣。如說持戒故心不悔乃至得解脫涅槃、行者念清淨戒・不缺戒・不破戒・不穿戒・不雜戒・自在戒・不著戒・智者所讚戒・無諸瑕隙、名爲清淨戒。云何名不缺戒、五衆戒(波羅夷・僧殘・波逸提・波羅提舍・尼・突吉羅の五篇戒なり)中除四重戒(姦・盜・殺・妄の四重禁戒)犯諸餘重者是名不缺犯、餘罪是爲破。復次身罪名缺、口罪名破。復次大罪名缺、小罪名破。善心廻向涅槃、不令結使種々惡覺觀得入、是名不穿。爲涅槃爲世間向二處、是名爲雜隨戒。專爲涅槃、是名不雜戒。不隨外緣如自在人無所繫屬、持是淨戒、不爲愛結所拘、是爲自在戒。於戒不發生愛慢等諸結使、知戒實相亦不取是戒。若取是戒譬如人在園圍桎梏所拘、雖得蒙赦而復爲金鎖所繫。人爲恩愛煩惱所繫如在牢獄雖得出家、愛著禁戒如著金鎖。行者若知戒は無漏因緣而不生著、是則解脫無所繫縛、是名不著戒。諸佛・菩薩・僻支佛及聲聞所讚戒、若行是戒用是戒、是名智所讚戒」。

智度論には次下に直に「復次智所讚者於三種戒中、無漏戒、不破不壞、依此戒得實智慧、是聖所讚戒……」と



述べて八聖道中の正語・正業・正命の三種を擧げて無漏戒の所由を示し、次いで「如<sup>レ</sup>は無漏戒在<sup>ニ</sup>八聖道中<sup>一</sup>亦爲<sup>ニ</sup>智者所讚<sup>一</sup>」と結んでをる。夫故に今こゝに引ける論の文に清淨戒・不缺戒・乃<sup>至</sup>智者所讚戒の八種戒名を列擧してをるもの、論の文勢より見て正しく智者所讚戒を根本としてをることは疑を容るゝ餘地がない。而して「行<sup>ニ</sup>是戒用<sup>ニ</sup>是戒<sup>一</sup>」是名智者所讚戒といへる是戒とは何物であるか。これ不缺戒・不破戒の釋に五衆戒と云ひ、四重戒と云ひ、其他の重罪(僧殘戒及び重禁戒未遂の偷蘭遮罪)を犯すと云へるによりて、苾芻の二百五十戒を要約せる五篇罪を指せるものである。その清淨戒は五篇戒により身口業清淨に、結使を離へず、果報を求めず、衆生を惱まさざる、自心清涼なるを總稱せる戒名と見るべく、不缺戒・不破戒は是戒を破缺せざる所に名づけ、不穿戒乃至不著戒の四は是の苾芻戒堅持の相貌に名づけ、以て是戒任持して梵行清淨なる、これ諸佛・菩薩・僻支佛・聲聞の智者に讚ぜらるゝ理なる故に智者所讚戒と名づけたのである。夫故に戒名八種を列ねたりとはいへ一苾芻戒に外ならぬのである。

然し龍樹が智者所讚戒なる語を用ふる所は上述の如く正語・正業・正命の三種無漏戒に名づけたると、有漏戒たる苾芻戒に名づけたるとの二種のみに局るのではない。更に八種戒及び十善戒にこの讚語を用ひてをるから、總説して智者所讚戒に四種ありと云ひ得るのである。八種戒については智度論卷十三(大正二五・一五三中初)に般若經の「罪不罪不可得の故に應に尸羅波羅蜜を具足すべし」の文を釋する一段に出づるものである。

「尸羅秦言性善・好行<sup>ニ</sup>善道<sup>一</sup>不<sup>ニ</sup>自放逸<sup>一</sup>是名<sup>ニ</sup>尸羅<sup>一</sup>。或受<sup>レ</sup>戒行<sup>レ</sup>善、或不<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>戒行<sup>レ</sup>善、皆名<sup>ニ</sup>尸羅<sup>一</sup>。尸羅者略說身口律儀

有<sup>ニ</sup>八種<sup>一</sup>、不惱害・不劫盜・不邪淫・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不飲酒及淨命、是名<sup>ニ</sup>戒相<sup>一</sup>。若不<sup>レ</sup>護放

捨、是名<sup>ニ</sup>破戒<sup>一</sup>、破<sup>ニ</sup>此戒<sup>一</sup>者墮<sup>ニ</sup>三惡道中<sup>一</sup>、若下持戒生<sup>ニ</sup>人中<sup>一</sup>、中持戒生<sup>ニ</sup>六欲天中<sup>一</sup>、上持戒又行<sup>ニ</sup>四禪四空定<sup>一</sup>生<sup>ニ</sup>

色無色界清淨天中。上持戒有三種。一、下清淨持戒得阿羅漢。二、中清淨持戒得辟支佛。三、上清淨持戒得佛道。不著・不猗・不破・不缺・聖所讚愛、如<sup>キ</sup>是名爲上清淨持戒。若慈愍衆生故、爲度衆生故、亦知戒實相故心不猗著、如<sup>キ</sup>此持戒將來<sup>シテ</sup>人至佛道、如<sup>キ</sup>是名爲得無上佛道戒。

この八種戒相は梵動經若しは阿摩晝經等の説相に基づけるものと推せられる。前七種は身口二業を開けるものであり不飲酒及び淨命を一種として不飲酒の次に淨命を置けるは、正しく香華を著せず、歌舞を觀ぜず、高牀に坐せず、金銀を受畜せず、及び其他の小縁の威儀戒行たる一切の非邪命生活を含めるものと推しうる。(十住毘婆沙論卷十六(暑八・七六左一五)には尸羅六十五分を述べて、其體は八種身口業なりとせり。これは飲酒及び淨命を)。龍樹がこの八戒を取りて「是名戒相」と斷定せるは興味ある所除きて身四口四に開けるのみ、身口七支を體とすると同じ)

である。この八戒は身口七支の外に不飲酒・不邪命の條項を入れて簡略にしてあるが、これを開けば梵動經等の廣汎なる説相となるものである。但し梵動經に於ては瑣細なる卑近なる小々因縁の威儀戒行なりと貶してあるが、それが其まゝ阿摩晝經・沙門果經・種德經・究羅憍頭經・佉形梵志經・布吒婆樓經・堅固經・露遮經・三明經等に取り入れられて戒蘊とし、比丘の戒具足の意義を成就せしめてをるのである。(阿摩晝經を除ける沙門果經以下の經には乃至して省略してあるが、その乃至の語の前後を對照することによりて戒蘊としての威儀戒行が省略されあるを知りうる。長部尼柯耶に)夫故に龍樹が八戒を出だして「是名戒相」と斷定したの、恐らくは此の八戒に戒蘊全般を總攝せしむる意底であつたらうと推せられる。而して此の八戒の持ち方に

より下中上を分ち、上持戒の中に更に下清淨・中清淨・上清淨の三種持戒を分ち、その上清淨持戒こそは無上佛道戒と稱せらるゝものであり、またその持ち方を示して不著・不猗・不破・不缺・聖所讚愛なりと述べてをるのである。此に依りて彼は在家出家・有漏無漏・人・天・三乘悉く此の八戒を尸羅の體とせるものであり、且又、此の八戒こそ

は正語・正業・正命に攝入されうるものである故に、苾芻戒としての二百五十戒の如きも皆攝せらるゝとするのである。然し今の文に不著・不猗……聖所讚愛とせるは、上清淨持戒たる無上佛道戒についてのみ述べてをると見るべきである。その聖所讚愛たる上清淨持戒の相に就いては、前述八聖道中の正語・正業・正命の無漏戒たる所以の龍樹の説示によりて明かであるが、更に論第十八卷(大正二五・一 九六上一)に「聲聞・辟支佛は初發心時に大願なく、大慈大悲なく、一切諸功德を求めず、一切三世十方佛を供養せず、審諦して諸法實相を求知せず、但、老病死苦を脱せんを求めんと欲するが故にと痛論し、諸菩薩は初發心より弘誓大願あり、大慈悲あり、一切諸功德を求め、一切三世十方諸佛を供養し、大刹智ありて諸法實相を求め、所謂淨觀不淨觀・常觀無常觀・樂觀苦觀・空觀實觀・我觀無我觀等の種々諸觀を除き、是の如き等の妄見心方の諸觀を捨て、但外緣中に實相を、所謂非淨非不淨・非常非々常・非樂非苦・非空非實・非我非無我を觀ず」と讚せる文により、かゝる大菩薩の戒實相に悟入し、罪不罪不可得の境地に證入し、別々解脫の境より別々無見の境に達して尸羅波羅蜜を行ずるもの、これを上清淨持戒の相と名づけ、そこに聖所讚愛と云はるゝのである。されば前に苾芻戒について清淨戒・不缺・不破……智者所讚戒といへるは聲聞有漏戒、今の上清淨持戒について不著・不猗……聖所讚愛といへるは菩薩無漏戒について云へるものである。

次に十善戒については十住毘婆沙論卷十五(譽八・六九 左一〇)に智者所讚十善道と稱してをる。龍樹は亦この十善戒に一切戒を攝して尸羅波羅蜜行としてをる。即ち智度論卷四十六(大正二五・一 三九五中)に、

「尸羅波羅蜜則總ニ一切戒法ニ譬如ニ大海總ニ攝衆流。所謂、不飲酒・不過中食・不杖加衆生等、是事十善中不攝、何以但說ニ十善。答曰、佛總相說ニ六波羅蜜ニ十善爲ニ總相戒、別相有ニ無量戒。不飲酒・不過中食入ニ不食中、杖不加衆

生等入<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>瞋中、餘道隨<sub>レ</sub>義相從。戒名<sub>ニ</sub>身業口業<sub>一</sub>・七善道所攝、十善道及<sub>ニ</sub>初後<sub>一</sub>如<sub>ニ</sub>發心欲<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>是時作<sub>ニ</sub>方便<sub>一</sub>、惡口鞭打繫縛斫刺乃至垂<sub>レ</sub>死皆屬<sub>レ</sub>於初。死後剝<sub>レ</sub>皮食噉割截歡喜皆名<sub>レ</sub>後、奪命是本體、此三事和合總名<sub>ニ</sub>殺不善道<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>是故知、說<sub>ニ</sub>十善道<sub>一</sub>則攝<sub>ニ</sub>一切戒<sub>一</sub>……十善道爲<sub>ニ</sub>舊戒<sub>一</sub>、餘律儀爲<sub>ニ</sub>客<sub>一</sub>……十二年中亦無<sub>ニ</sub>此戒<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>是故知、是客……十善道、七事は戒、三篇<sub>ニ</sub>守護<sub>一</sub>、故通名爲<sub>ニ</sub>尸羅波羅蜜<sub>一</sub>。

これ十善戒を以て一切戒を攝する總相戒とし、これを開けば無量の戒・無量の威儀となるの例證を示せるもの、且つ有佛にも無佛にも世間に常に是の善法教の舊戒あり、是れ世尊成道十二年以後に於て興れる客戒即ち新戒たる制教の如きは十善道の一分に過ぎず、その十善道の中身三口四の七事は尸羅の體であり、不貪・不瞋・不邪見の三道は尸羅の守護たるもの、夫故に共に尸羅波羅蜜と名づけうるとの意である。こゝに守護とあるのは三善道は寧ろ身三口四の根本となる意である。智論八十卷(大正二五・六二四上・一六)には「慈業是れ三善道、尸羅波羅蜜の根本なり、所謂不貪・不瞋・正見なり。是の三慈業能く三種身業四種口業を生ず」とあるにより明かである。而してその十善道修相については菩薩は四十種行を以て行する。即ち自ら殺生せず、他をして殺生せしめず、不殺生法を讚歎し、不殺生者を歡喜讚歎す……自ら邪見ならず、人をして邪見ならしめず、不邪見法を讚歎し、不邪見行者を歡喜讚歎する。而して十住毘婆沙論卷十五(署八・六九左一〇)には「菩薩の修する十善道は聲聞辟支佛を求むる者よりも轉、勝れてをる。それは一心に意を用ひて修行し、休息せず、自利の爲に、また一切衆生に廻向し利安する他利の爲にし、更に清淨に修行するからである。その清淨修行とは不壞行・無雜行・不濁行・自在行・具足行・不貪著行・智者所讚行である。不壞行とは行不行あることなきをいふ。無雜行とは自ら作さずして他をしてのみ作さしむる如きことなきをいふ。不濁行とは煩惱罪業と合

行することなきをいふ。自在行とは持戒者は田業妻子財物に繫屬せらるゝなく意に隨せて自在なるをいふ。具足行とは一切の大小の戒を行じて諸の煩惱を遮止し常に憶念し守護して禪定の爲の因縁と作し、佛道に廻向して眞際法性に同ぜしむるをいふ。不貪著行とは世間に向はず、戒相に取著して自ら高くし他を卑むることなきをいふ。而して智者所讃行とは聲聞法中にては但涅槃の爲にして生死に隨はざるを智者所讃と名づくるも、大乘法中にては生死のみならず、尙ほ聲聞僻支佛乘にすら向はしめず、但無上菩提に向はしむ、夫故に智者所讃の十善道と名づく」と釋してをる。以上は菩薩の十善修相の行類相貌である。しかし此等十善行類相貌に著するあらば不牢固にして破戒を成ずる。智論卷三十九(大正二五・三 四五中二五)に舍利弗が世尊に菩薩の身業不淨・口業不淨・意業不淨とは云何なるものなりや(經)と問ふたに對し、論に舍利弗は智慧第一なれば身口意の惡業を知らざるには非ず、但、聲聞法中に於て知れるのみ、菩薩の三業は事異るが故に知らざるなり。菩薩としては一念たりとも聲聞僻支佛の考ふるが如き心を生ぜんには是れ菩薩の破戒である。聲聞舍利弗等は身の三不善道・口の四不善道・意の三不善道を知りて身口意の罪とするも、菩薩は然らず、かかる身口意の差別相に取著するのが菩薩の身口意罪なりとする。法空に住する菩薩に於ては是の三を見ざるを無罪とし、是の三業を見るを罪とする。夫故に聲聞法中には十不善道を罪業と爲すも、摩訶衍中には身口意の所作あるを見るを罪とする。これ作あり見あり・作者見者ありとするは皆是れ虚誑なるが故である。小乘人は三惡道を畏るゝが故に十不善業を以て罪と爲すも、大乘人は一切に著心を生じ有相の見解に取じて空・無相・無願の三解脱門に相違するを罪とする。若し三業の相あるを見るならば惡を起さずとも不牢固と名づけ、若し三業の相を見ないならば、その見ざる所が是れ三善業の根本であり、それを牢固と名づく。是の三事の相を見るが故に慳貪相・犯戒相・瞋恚相・懈怠

相・散亂相・愚癡相を起すのである。されば因なければ果なく、樹なければ蔭なきが如くに、三業の相を取らざる時自ら身口意の麤罪を除くのである。夫故に罪不罪不可得の畢竟空に住して而も十善道を行じ、一念も聲聞僻支佛の心を生ぜず、不取相心を以て一切の善根を無上佛道に廻向する所、是れ尸羅波羅蜜を行すと名づくる。されば十住毘婆沙論卷十六(署八・七七)にも、善の身口業を尸羅とする以外に更に尸羅ありやと問ひ、答ふるに、更に修習し親近し樂行するを尸羅とす。然も更に最勝の修習尸羅を説くべしといひて偈を説いてをる。

「若無我々所 遠離諸戲論 一切無所得 是名上尸羅」。

これ内法に於て我あるを見ず、外法に於て我所あるを見ず、内外法畢竟空にして無所得なりと知らば、取相・戲論に陥入らず、これを最勝尸羅・上尸羅と爲す。これ若し内外法の實相を知らざれば差別の妄見生じ、そこに尸羅を持つことに於てすら憍慢貪著を生ずるに至り諸の罪門を開くに至る故である。こゝに於て尸羅とは無我・無非我・無作・無不作・無作者・無行・無不行・無名・無色・無相・無無相・非善・非々善・非寂滅・非々寂滅・非取・非捨・無衆生・無衆生因縁・無身・無口・無心・無世間・無世間法・不依世間に名づくと釋せられ、智論卷八十八(大正二五・六七五中二一)には(經)「是菩薩は一切法の無相を知るが故に、須陀洹果を知れども中に住まらず、斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を知れども亦中に住まらず、僻支佛道を知れども亦中に住まらず、是れ一切種智を用ふればなり、これ聲聞僻支佛と共にざる所、かくの如く菩薩は一切法の無相を知り已り、六波羅蜜の無相を知り、一切佛法の無相を知るが故に能く無相尸羅波羅蜜を具足する、是戒これ不缺・不破・不雜・不著・聖人所讚無漏戒にして八聖道分に入り、是の戒中に住して一切戒を持つ、所謂、名字戒・自然戒・律儀戒・作戒・無作戒・威儀戒・非威儀戒なり」と説かるゝので

ある。

以上、智度論・十住毘婆沙論等に依りて龍樹の智所讚戒に四種あるを觀たのであるが、龍樹の域心に於ては果して孰れにあつたか。惟ふに龍樹の戒觀は縹緲として容易に窺知しうるものではない。人多く智度論卷六（大正二五・一〇七中一三）に引ける諸法無行經の喜根・勝意の二菩薩比丘の本生因縁を例證して、嬉怒癡の一相法門に入れる喜根を稱讚し、戒行頭陀を讚じ少欲知足を讚ぜる勝意を貶斥して、龍樹の態度を喜根菩薩に相應せしむるものもある、それは龍樹を去ること遠いものである。龍樹は二乗心を貶すること極めて痛烈であるがその戒行を貶せるものではない。彼は十善總相戒としてそこに一切の佛制戒條を包攝せしめてをる。彼が律藏に精通し是を任持せるの例證は論中隨處に見得らる。智論卷四十（大正二五・三・五三中一八）に（經）「世尊が是の般若波羅蜜品を説きたまひし時三百の比丘は坐より起ちて所著の衣を以て佛に上り阿耨多羅三藐三菩提を發せり」と。是語に對して論（三五三）には、

「問曰、如<sup>シバ</sup>佛結戒<sup>ハ</sup>比丘<sup>ハ</sup>三衣不<sup>レ</sup>應<sup>カク</sup>少、是諸比丘何以故破<sup>ニ</sup>戸羅波羅蜜<sup>セル</sup>作<sup>ニ</sup>檀波羅蜜<sup>カク</sup>答曰、有<sup>レ</sup>人言、佛過<sup>ニ</sup>十二歲<sup>（一）</sup>然後結戒、是比丘施衣時未<sup>ニ</sup>結戒<sup>（二）</sup>有<sup>レ</sup>人言、是比丘有<sup>ニ</sup>淨施衣<sup>セル</sup>心生當受、以<sup>レ</sup>是故施<sup>（三）</sup>有<sup>レ</sup>人言、是諸比丘多知識即能更得、事<sup>（四）</sup>不<sup>レ</sup>經宿。復次有<sup>レ</sup>人言、是諸比丘聞<sup>ニ</sup>佛說<sup>（五）</sup>諸菩薩行<sup>ニ</sup>檀波羅蜜<sup>セル</sup>諸功德力勢無量故得<sup>ニ</sup>與<sup>（六）</sup>般若波羅蜜<sup>セル</sup>相應<sup>（七）</sup>心大踴躍即以<sup>レ</sup>衣施無<sup>ニ</sup>復他念<sup>セル</sup>不<sup>レ</sup>故破<sup>ニ</sup>戒<sup>（八）</sup>復次諸比丘知<sup>（九）</sup>佛法畢竟空無<sup>（一〇）</sup>所著<sup>（一一）</sup>斷<sup>（一二）</sup>法愛、爲<sup>ニ</sup>世諦故結戒非<sup>（一三）</sup>第一義、是比丘從<sup>ニ</sup>佛聞<sup>（一四）</sup>第一義及布施等六波羅蜜、聞<sup>ニ</sup>諸菩薩種々大威力、慍<sup>（一五）</sup>念衆生爲<sup>ニ</sup>諸煩惱<sup>（一六）</sup>所<sup>レ</sup>覆不<sup>レ</sup>能<sup>（一七）</sup>得<sup>（一八）</sup>是菩薩功德、是故生<sup>ニ</sup>大悲心<sup>（一九）</sup>爲<sup>ニ</sup>衆生<sup>（二〇）</sup>故發<sup>ニ</sup>阿耨多羅三藐三菩提意<sup>（二一）</sup>以<sup>レ</sup>是故以<sup>レ</sup>衣布施。若人以<sup>ニ</sup>貪欲・瞋恚・怖畏・邪見・不恭敬心<sup>（二二）</sup>輕<sup>（二三）</sup>佛語<sup>（二四）</sup>而不<sup>レ</sup>持<sup>（二五）</sup>戒是名爲<sup>ニ</sup>破戒<sup>（二六）</sup>、是諸比丘都無<sup>（二七）</sup>此心、是故無<sup>ニ</sup>破戒罪<sup>（二八）</sup>」。

聖所愛戒に就いて

これ律行上最も重要な三衣の問題である。龍樹は有人の言に托して五通りの理由を擧げて三衣を離るとも尼薩者波逸提法第二の離衣宿戒<sup>リエジユク</sup>を犯したことはない<sup>リ</sup>と答へてをる。特に第二第三の答の如きは彼が律儀通曉の賢者なることの明證といふべきである。第二答の「是比丘有淨施衣心<sup>ズラク</sup>生<sup>シト</sup>當受<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>是故施<sup>レ</sup>」の文意は、三百の是等の比丘には淨施作法を経たる餘分の袈裟がある、それ故に所著の衣を世尊に奉ずる時、心に念を生じて口に言ふ「當に受くべし」と。「受くべし」とは餘分の衣を受持作法を経て著するとの意である。第三答は淨施衣なき場合の答である。淨施衣とは自らが檀越より受けたる衣であるが我所有<sup>ガシヨウ</sup>の念を離るゝ爲に衣施を受けてより十日以内に他比丘に一時施與するの作法を爲して他比丘の衣となし、而も衣其物は自分の房中に藏置するのである。若し水に流され火に焼かれ賊に奪はれて衣を要する時は、淨施せる他比丘に告げたる上にて受持作法を経て著用しうるのである。然し第三の答はこの淨施衣を有つてゐない比丘についての場合である。文に「是諸比丘多知多識、即能更得、事不<sup>レ</sup>經宿<sup>レ</sup>」とある。多知多識即ち多くに知られてをる名聞高き比丘なれば、直ちに更に施衣を受けることが出来るから、衣事に關して缺衣のまゝ、一宿(一夜)を経て離衣宿戒に觸犯するやうなことは無いとの意である。第四答は聞法歡喜の上の施衣であつて故意の犯戒でないから破戒にはならぬ。第五答は不恭敬心や佛制を輕んじての憍慢心からではないから破戒の罪はない、のみならず衆生に對する大悲心の上からの施衣なる故に、寧ろ世尊に衣を奉ぜないのが菩薩の破戒であるとの文意が藏されてをると見るべきである。

右は龍樹が律藏所制に對し極めて慇懃なる恭敬心を持してをつた一例に過ぎない。智論卷二十六<sup>(二五三)</sup><sub>(上一七)</sub>に於ける釋尊の石鉢受用の問答、卷六十八<sup>(五三七)</sup><sub>(下二)</sub>に於ける十二頭陀の解釋、卷九十三<sup>(七一)</sup><sub>(中四)</sub>に於ける阿梨吒比丘の「雖<sup>レ</sup>受<sup>ニ</sup>





沙彌菩薩・沙彌菩薩摩訶薩とある。夫故に大乘經典上、文殊菩薩・彌勒菩薩の如くに單に菩薩とのみありても出家の菩薩なる限り、それは菩薩なる比丘又は比丘なる菩薩として味讀すべきである。此の意味に於て龍樹に對しても吾々は龍樹菩薩と呼び習はしてゐるが龍樹菩薩比丘若しは龍樹比丘菩薩なる意を以て呼ぶべきである。世親菩薩に對しても亦同様である。

龍樹の戒觀は是くの如くである。龍樹は律藏所制の僧制を殷重に修したのである。しかし龍樹はそこに停住してゐたのではない。彼は尸羅を行じたのではなく、尸羅波羅蜜を行じた。彼は般若經に示すが如く夢中にも十善道を行じなかつた。即ち彼は夢中にも十善道を行じた。然しそれは單なる十善戒を行じたのではなくて十善波羅蜜を行じたのである。彼は律藏所制の僧制を遵奉した。しかしそれは出家儀禮としての僧制に隨順したのではなくて僧制波羅蜜を行じたのである。彼は出入來去等に安詳に、一心に舉足下足して常に地を視て行いた。然しそれは衆生を守護し、衆生を惱まさず、衆生の亂心を避けしめんが爲である。此等は二乗の如き單なる攝心護根ではない、攝心波羅蜜・護根波羅蜜である。彼は十二頭陀を行じたとはいへ、單なる阿蘭若法アランジャホフ、單なる但三衣法タシザンネホフを行じたのではない。彼は阿蘭若法を行じつゝ、阿蘭若法を貴ばず、但三衣法を行じつゝ、但三衣法を貴ばず、貴ばずとはこれ究竟道に非ず、究竟道の因縁少分なりとの意である。究竟道とは阿蘭若法波羅蜜・但三衣法波羅蜜たる時に究竟道と云ひ得る。これ彼が般若波羅蜜の力興盛なるが故に一切の行法皆般若と合して一味となり、茲に十善波羅蜜乃至阿蘭若法波羅蜜・但三衣法波羅蜜を成ずる、恰も苦辛不美の馬麥マヤクの如きも佛の口中に在りては最上味となるが如く、又石蜜蜜を煮るに中に入れたる種々物皆石蜜を成ずるが如くである、これ妙味力強盛なるが故である。それ故に尸羅と尸羅波羅蜜に於ても單に惡

を捨て善を行するのみならばそれは尸羅であるが、般若波羅蜜と相應する時尸羅波羅蜜となる。即ち深く諸法の相に入り空三昧を行じて不可得の境に悟入する慧眼觀即ち空觀の強盛力によりて十善の尸羅も尸羅波羅蜜と成る。夫故に智論第十三(一五三) 中初には「經」罪不罪不可得故應具足尸羅波羅蜜」といひ、智論第十四(一六三) 中末には「於罪不罪不可得故」是時名爲尸羅波羅蜜」と云ひ、十住毘婆沙論(卷八・七七) 右末には「尸羅名三不分別」と釋せる如きは皆この意味である。彼が十善を智所讚戒といひ、智者所讚の十善道といへるは此の最高の境地を云へるものである。正語・正業・正命の智所讚戒、身口七支及び飲酒・淨命の八種戒の智所讚戒も皆この最高の境地に攝入せらるゝ。而して苾芻戒の智所讚戒も亦これ十善波羅蜜等流の戒であると觀られうる。而して智論卷八十(前出)には「慈業是れ三善道、尸羅波羅蜜の根本なり……」とある故に十善も一慈業に結歸する。從つて一切戒も亦一慈業に攝在する。涅槃經卷二十八(盈六・三) 五右八に「持戒に亦二あり、一に究竟戒、二に不究竟戒なり……我れ昔一時舍利弗及び五百弟子と共に摩伽陀國瞻波大城に止住せるに、時に獵師ありて一鵠を追逐せり。是鵠惶怖して舍利弗の影に至るも猶ほ故は戰慄せること芭蕉樹の動するが如かりしに、我が影中に至るや身心安穩にして恐怖除くるを得たり。是故に當に知るべし、如來世尊は畢竟持戒にして乃し身影に至るまでも猶ほ是力あるを」と。此文はこれ釋尊の慈業の究竟を教示せるもの、一切戒行は十善道に歸し、十善道は不貪・不瞋・正見の三慈業に歸し、三慈業は一慈業に歸し、而も慈業の究竟は佛に歸する。そは又無慈業の慈業ともいひうる。即ち無相の慈波羅蜜・無相の尸羅波羅蜜具足である。菩薩は未だ證時にあらず、是れ觀時なるが故に究竟の慈波羅蜜を證せずとはいへ、この慈業を觀する位である。そこに世間の爲に良福田と作り、決定安穩の阿鞞跋致地がある。是事たる良に微妙にして難得の境地である。大乘戒の歸結としては、實にこの

深廣無涯の慈に落居すべきものと斷じうる。

## 六、清淨戒・不缺戒・不破戒乃至智所讚戒の名數について

智度論中に於ける清淨戒・不缺戒等の戒名の数に就いては増減出沒がある。即ち(1)論第十三(中・一五三)(論)、上清淨持戒を示す下には不著・不猗・不破・不缺・聖所讚愛の五種であり、(2)論第二十二(下・末二二五)(論)、出家人の初門として行者念清淨戒・不缺戒・不破戒・不穿戒・不雜戒・自在戒・不著戒・智者所讚戒の八種を列ねて一々戒を解釋し、(3)論第八十七卷(六六七・下・二四)(經)、菩薩の念戒を明す下に聖戒・無缺戒・無隙戒・無瑕戒・無濁戒・無著戒・自在戒・智者所讚戒・具足戒・隨定戒の十種を列ぬ。(4)而も同卷(六七・下・二〇)(經)に尸羅波羅蜜を行する下、聖無漏入八聖道分戒を持つについて不缺・不破・不雜・不濁・不著・自在戒・智所讚戒の七種を列ぬ。(5)論第八十八卷(六七五・下・初)(經)に無相尸羅波羅蜜を具足するを明すにつき不缺・不破・不雜・不著・聖人所讚の五種を列ぬ。(6)論第九十一卷(七〇二・中・二〇)(經)、菩薩の、尸羅波羅蜜に住して諸衆生をして十善道を行じて十不善道を遠離せしむるにつき、此等衆生が不破戒・不缺戒・不濁戒・不雜戒・不取戒を持つとして五種を列ねてをる。(1)(2)の二種は龍樹の釋であり、(3)(4)(5)(6)の四種は摩訶般若波羅蜜經に出づる故に、次第の如く羅什譯同經二十三卷(大正八・三・八六・上・五)・(三八七・中・一一)及び同經二十六卷(四〇七・上・二八)に出づる。此等は何れも苾芻戒乃至十善道を行ずるについての其の持相を種々の觀點より名づけたるに過ぎないから、五種・七種・八種・十種の如く數を異にするとも別體あるものではない。夫故に開合の相違に過ぎない。玄奘譯大品般若即ち大般若經四百六十七卷(大正七・三・六〇・中・三)には能以離相無漏之心受持淨戒、謂聖無漏道支所

攝法爾所得善清淨戒、如<sub>レ</sub>是淨戒、無<sub>レ</sub>缺・無<sub>レ</sub>隙・無<sub>レ</sub>瑕・無<sub>レ</sub>穢・無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>取著<sub>一</sub>・應<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>供養<sub>一</sub>・智者所<sub>レ</sub>讚、由<sub>二</sub>此淨戒<sub>一</sub>於<sub>二</sub>一切法<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>取著<sub>一</sub>として六種を列ぬるも無漏の善清淨戒の持ち方を示すが故に「如<sub>レ</sub>是淨戒」なる語があるのである。更に同卷(三六四・下・二二)には應受供養智者所讚の次に妙善受持・妙善究竟、是聖無漏、是出世間道支所攝の言ありて智度論十種戒の具足戒・隨定戒に相當する語がある。但、智度論には八種戒について一々に解釋を施し、十住毘婆沙論第十五(署八・六九・左・二〇)にも不壞行・無雜行・不濁行・自在行・具足行・不貪著行・智者所讚行の七種について一々に解釋してゐるより見るに八種若しくは七種が基本型なるべしと考へられる。八種・七種は總名である清淨戒とか聖戒を一種とするか或は此を除くかに由りて相違してゐる故に、是を除けば八種も七種であり、是を加ふれば七種も八種である。同様に十種も九種であり、九種も十種である。十住毘婆沙論第十二(署八・五六・左・一七)には無毀些・不雜汚・不濁・清淨・無損・不取・不依・不得・不退・聖所讚・智所稱・隨波羅提木叉・具足威儀行處……等の六十用心を開き、更に同論第十六(署八・七六・右・一八)には如<sub>下</sub>寶頂經和合佛法品中無盡意菩薩於<sub>二</sub>佛前<sub>一</sub>說<sub>中</sub>六十五種尸羅波羅蜜分として六十五種を列ぬる中、第十五分より第二十一分までが今の八種戒又は七種戒に相當するものである。其他、易行戒・不可呵戒・善護戒・名聞戒・少欲戒・知足戒・遠離戒乃至得佛三昧戒の戒名を列ぬるも孰れも尸羅の體にあらざる故に尸羅分と名づけ、身口七支の尸羅の體を利益するが故に尸羅分と名つくと釋してゐる。是に依りて今の十種・八種・七種等も尸羅の體ではなくて尸羅の分である。尸羅の體は増減しうべからざるも尸羅の分は開合自在である。されば智度論の八種又は七種を基として十種に開き或は六種五種に合したるものと見るべきである。夫故に瑜伽論卷十八(來一・八三・左・一六)には「云何具<sub>二</sub>尸羅<sub>一</sub>、謂如<sub>レ</sub>是出家、如<sub>レ</sub>是愛樂故於<sub>レ</sub>戒無缺乃至無雜……」と記し、同卷十六(來一・七三・左・二)・同卷八十二(來五・七・左・二〇)・同

卷六十二(來四・六・左四)・同卷二十二(來二・六・右一九)・同卷三十一(來二・四九・左四)・同卷四十四(來三・一五・左末)・同卷八十三(來五・二・右一四)等には無穿缺・不毀犯無穿缺・毀戒穿戒・無缺無穿・無毀犯無穿缺の如く略出してゐるが、十八卷の文の如く無缺乃至無難とせる乃至の語の中には不破不穿等を含めるものと見るべきである。是等の例證に由りて七種若しは八種に基ける開合の相違に過ぎないことが了解されう。而して以上七種若しは八種を基本型とすることは智度論及び智度論の依れる大品般若に據りて推究したのであるが、更に大品般若の基づく玄奘譯小品般若(大正七・八四・三・上二二)には「常所修學清淨尸羅、無缺尸羅、無隙尸羅、無雜尸羅、無穢尸羅、圓滿戒蘊」(東洋文庫校刊、八千頌般若・P. 10. 2. 805. 1-510 參照)とありて五種を記してゐる。されば大乘經典中にては、その原始成立とも見らるゝ小品般若の記なる故に、清淨・無缺・無隙・無雜・無穢の五種を以て基本型と見るべきであらう。

以上述ぶる所により、戒の名數に多寡の相違あるとも、それは戒の種類ではなくて戒の持相又は持戒の徳用を種々に形容せるものに過ぎないのである。華嚴經第十二卷(大正九・四七・五・上二八)には菩薩の戒藏として饒益戒・不受戒・無著戒・安住戒・不諍戒・不惱害戒・不雜戒・離邪命戒・離惡戒・清淨戒を列ね、同第十六卷(五〇・一・上七)には香を布施する時一切衆生をして戒香を具足し、不壞戒・不雜戒・離垢戒・離疑戒・離纏戒・清涼戒・不犯戒・無量戒・無上戒・離世間戒・菩薩究竟至彼岸戒を得せしめんと願する如き、其他第三十三卷(六三・三・下初)の十種戒、或は第四十六卷(六九・二・下初)海岸國善住比丘の下に大悲戒・諸波羅蜜戒・乘大乘戒・不捨菩薩道戒・滅障礙戒・菩薩藏戒・不捨菩提心戒・一切佛法深心戒・念一切智・不妄戒・如虛空戒・一切世間無所依戒・不可壞戒・無譬喻戒・不濁戒・不雜戒・離疑戒・清淨戒・離塵戒・離垢淨戒の二十種戒名を列ねてゐる。皆これ無相尸羅波羅蜜の上清淨持戒に於ける功德に名

づけられたるもの、且又、此等の戒名の内に不缺不破不濁等の基本型の交雜せるを觀取しうるのである。同様に大乘涅槃經第十一(盈五・五八・右一二)には菩薩の護持禁戒の相として具足根本業清淨戒・前後眷屬清淨戒・非諸惡覺覺清淨戒・

護持正念念清淨戒・廻向阿耨多羅三藐三菩提戒の五種を列ね、同卷(五八・左一九)には菩薩、衆生をして禁戒を護持して清

淨戒・善戒・不缺戒・不折戒・大乘戒・不退戒・隨順戒・畢竟戒・具足成就波羅蜜戒を得せしめんと願すとして十種

を列し、同第十五卷(七七・右五)には華香を布施する時、諸衆生をして戒香具足して無礙戒・堅牢戒・無悔戒・一切智戒・無

戒・未曾有戒・無師戒・無作戒・無荒戒・無汚染戒・竟已戒・究竟戒・平等戒・無上戒・大乘戒を得て尸羅波羅蜜

を具足して諸佛所成就戒の如くなりしめんと願じ、同第二十六卷(盈六・二七・左九)には破戒・缺戒・瑕戒・雜戒を作さず、

聲聞戒を作さず、菩薩摩訶薩戒・尸羅波羅蜜戒を受持し、戒を具足するを得て憍慢を生ぜず、是を菩薩修ニ大涅槃具ニ

足第三戒と名づく述べてをる(第三戒とは菩薩は信・直心・戒・親近善友・多聞の五事を具足し成就すべく、今は五事中の第三戒具足の義なり)。かくの如く華嚴の十無盡戒藏

といひ、涅槃の五支十戒といひ、其他のあらゆる戒名も悉く尸羅波羅蜜具足の讃言若しは轉釋に過ぎず、要は小品・

大品の般若に示すが如く五種若しは七種に歸しうるものであり、又、五種七種も智所讚戒若しは聖所愛戒に歸結し、

それは清淨戒・聖戒・無相尸羅波羅蜜に盡くるものである。

然るに天台大師に至り涅槃經の五支戒及び十種戒と智度論の十種戒とを對照して、律儀戒と定共戒と道共戒とに適應せしめてをる。法華玄義(釋籤會本三ノ下)には涅槃經の五支を自行の五支、十種戒を護他の十戒(荆溪は止觀輔行(四ノ一・一八左)に願他の

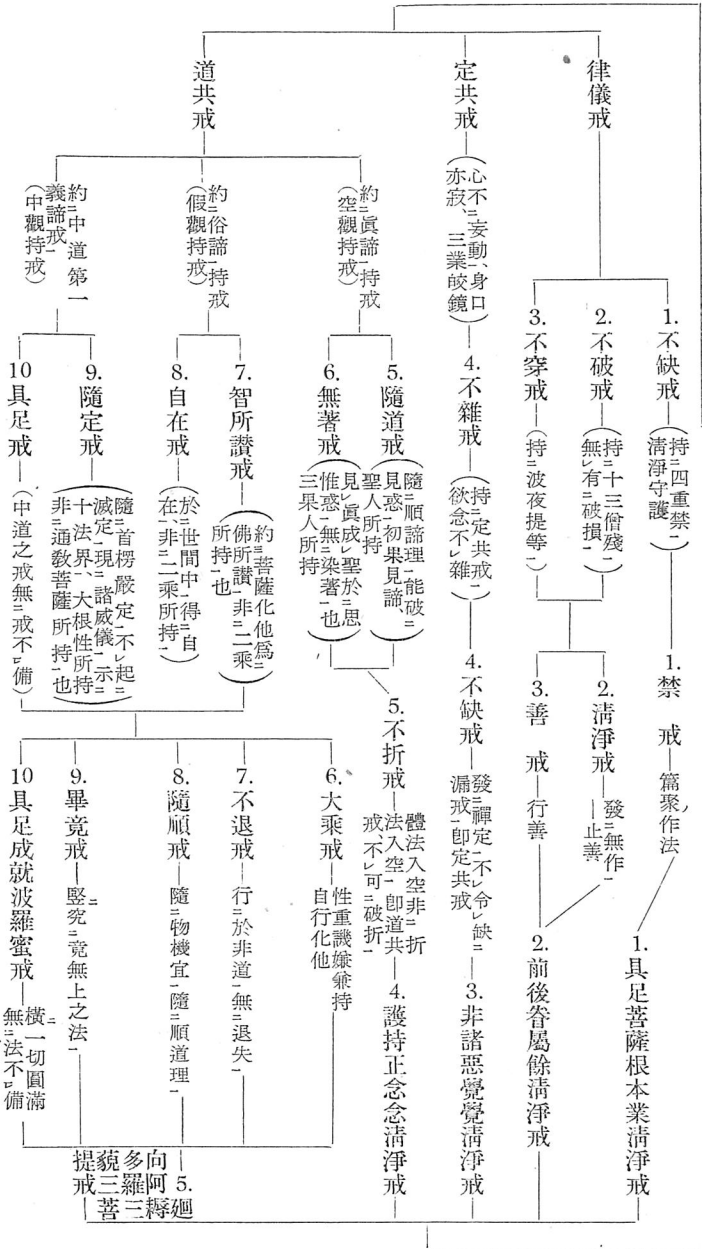
十戒と)と名づけ、五支戒と十種戒と義勢略同じと言ひ、荆溪は開合の異のみと釋してをる。今、止觀・玄義の釋によ

り是等の經と論との諸戒を圖示するに次の如くである。

涅槃・智論五支十戒相攝圖

智論十戒

涅槃願他十戒  
涅槃自行五支





圖示せるが如く、その三觀三戒に配して五支十戒を相攝せるの相極めて巧妙である。更に玄義(三ノ下)・止觀(四ノ左)には麤妙の判を施して涅槃の禁戒・清淨戒・善戒・不缺の四は三藏教の攝、不析戒は通教の攝、大乘・不退の二戒は別教の攝にして亦通教を兼ね、隨順・畢竟・具足波羅蜜の三戒は圓教の攝なりとし、前三教の戒を麤戒とし圓教の戒を妙戒と判じてをる。然し是等の妙釋も天台の獨斷に出づるものに外ならぬ。第一に智論の十戒の第五を隨道戒とせるは何に據れるか、前引の智論の八戒にも十戒にも隨道戒なる戒名は存しない。第二に第一戒の清淨戒を何故に省いたか、智論の清淨戒と涅槃の第一護持禁戒とを對照せしむべきでありて論の不缺戒と護持禁戒とを對照することは經及び論の文の前後に相應せないのである。第三に不缺戒・不破戒・不穿戒の解釋は智論第二十二卷(前出)の解釋に何等相應することなき獨斷に過ぎない。第四に不雜戒を定共戒とし、且つ涅槃の不缺戒と對照せしむる如きことも所由なきものであり、智論・十住毘婆沙論の釋に何等稟くる所なきものである。第五に無著戒を無漏道共戒として涅槃の不折戒に對照せしめ、而も體法入空にして折法入空に非ずとせる如きは、智論の「戒は是れ無漏のための因縁なるを知りて著を生ぜざるを不著とす」ありて有漏戒としての解釋なるに相應せない。總じて智論の十戒を有漏戒・無漏戒に分別することが根本的に誤まれるものである。十戒全體が有漏戒の持相であり、十戒全體が無漏戒の持相である。涅槃經の十戒も同様である。智者所讚戒と言はるゝ所以は無漏戒なるが故ではあるが、有漏戒もこれ無漏戒への因縁なる故に智者所讚戒の讚言を與へうるとは智論・瑜伽論の共に述ぶる所である。天台の作せる解釋に依れば智者所讚戒を無漏戒に局限することになり、論の指示に添はざる結果を招くのである。されば十戒を三戒に配し三觀に配せるは、いかにも天台風の妙解なるが如く見ゆるも、其實根柢から覆へさるべきものに過ぎない。涅槃經の十戒との對照の如

きも、對照すべからざるものを對照し、對照の要なきものを對照する故に甚だしい無理に陥入るのである。十種は必ずしも十種なるを要せない、九種・八種・七種・五種の文獻もあり、また六十五種尸羅分の證文もある故に伸縮自在なるものである。この道理を辨へるならば、かゝる矛盾多き誤謬に充てる對照解釋を施す必要は更々なきものである。

尙、智度論卷二十二には清淨戒・不缺戒・不破戒・不穿戒・不雜戒・自在戒・不著戒・智者所讚戒の八種戒については一々の解釋があるから明了であるが、十種戒に於ける隨定戒と具足戒に就いては知る由もない。但、十住毘婆沙論(署八・六九)には不壞行・無雜行・不濁行・自在行・具足行・不貪著行・智者所讚行の七種を列ね、一々を解釋してをる。これによれば具足行とは「盡行一切大小戒・遮止煩惱・常憶念守護爲・禪定・作・因緣・廻・向佛道・能令・同・眞際法性・是名具足」と釋してある。一切大小戒とは大乘小乘の一切戒といふ意味ではない、苾芻戒に於ける四波羅夷の重禁戒及び突吉羅・衆學法等の微小戒をいひ、重輕の一切戒と解すべきである。海を渡る者の浮囊の喩の如く、一切の重輕の戒を堅固護持するを具足といふのである。隨定戒については其意義を知るを得ないのであるが、玄奘譯大品般若(出前)には智者所讚の次に妙善受持・妙善究竟、是聖無漏、是出世間道支所攝とある故に隨定具足の二戒は妙善受持・妙善究竟に相當するものと推しうる。然し妙善受持の言を具足戒に相當せしめうるとしても、妙善究竟の語を隨定戒なりと定むることは困難である。然るに長阿含第六小緣經(大正一・三七)には「篤信於戒・聖戒具足、無有缺漏、無諸瑕隙、亦無點汚、智者所稱、具足善寂」とあり、同第九、十上經(五四・五一)には「復次比丘、聖所行戒、不犯不毀、無有染汚、智者所稱、善具足持、成就定意」とある。兩經共に智者所稱(智者所讚)の語の次に「具足善寂」又は

善具足持、成就定意」の語がある故に、具足は善具足持に、善寂は成就定意の義なりと解し得る。茲に於て大品の妙善受持の語は具足又は善具足持に、妙善究竟の語は善寂又は成就定意の義なりと推定し得る。随つて隨定戒とは成就定意の義なりと斷じうるのであるが、しかし尙も隨定戒とは定共戒に非ざるなきかとの疑が起り來るのである。小緣經及び十上經の此等の語に相應する文は處々に出てをる。即ち中阿含第五舍梨子相應品等心經（大正一・四四）には「若有一人因下修習禁戒、無穿・無缺・無穢・無濁・極多無難、聖所稱譽・善修善具、故復學厭欲無欲斷欲……」とあり、同第五十五持齋經（大正一・七）には「持齋時憶念自戒、不穿・無穢・無汚・極廣極大、不望其報・智者稱譽・善具善趣・善受善持」とある。同三十卷優婆塞經（上六・一七）には「白衣聖弟子、自念戸賴（梵音）、此戸賴不穿・不穢・無穢・無濁・住如地不虛妄・聖所稱譽・具善受持」とあり、雜阿含第二十一卷六念說法の下（大正二・一四三下）には「次聖弟子念於戒德、念不穿戒・不斷戒・純厚戒・不離戒・非盜取戒・善究竟戒・可讚歎戒・梵行不憎惡戒」とあり、次下（中二・五）には「念戒功德、自持正戒、不毀・不穿・不斷・不壞・非盜取戒・究竟戒・可讚歎戒・梵行戒・不憎惡戒」とある。

以上は阿舍に於ける不穿不破等の類文を探り、且つ智度論所引の大品般若經の十種戒中、智所讚戒の次下なる具足戒と隨定戒に相應する語を求めて兩戒の意義を明らかにせんと試みたのであるが、依然として其の正確なる意義を見出だすを得ないのである。然るに幸にも巴利涅槃經文（第一章）に依りて漸く此義を明らかにするを得るのである。

yāvakiyaṃ ca bhikkhave bhikkhū yāni tāni sīlāni akhaṇḍāni acchiddāni asabalāni akammāsāni bhujissāni

聖所愛戒に就いて

vinūpasatthani aparāmaṭṭhāni samādhisaṃyattanikāni tathārūpesu silesu sīla-sāmañña-gatā vīharissanti  
 sabrahmacārihi āvi c'eva raho ca, vuddhi yeva bhikkhave bhikkhūnaṃ pāṭikākhā no parihāni.

(若し又比丘達よ、比丘達にしてその戒たる、破壊せず・斷絶せず・穢されず・斑點(雜)ならず・自在なる・智者に稱讃せられ・著せざる・三昧に導き轉じ行く是の如きの戒に於て戒具足して、顯露にも靜處にも梵行者と共に住せん限り、比丘達よ、比丘達の興立は待ち設けられて衰滅なけん)。

此文に依りて隨定戒なるものは「禪定に導き向はしむる戒」、即ち禪定發起の因縁たる戒行の義であることが知られる。されば智度論卷二十二(前記第五項初參照)に記せる如く、戒は一切善法の住處であり、出家人の初門であり、能く諸の深禪定及び實相智慧を生長し涅槃に到らしむるの初因縁なる意味に於て隨定戒の語を見るべきである。これを定共戒と解し、又は天台大師の如く首楞嚴定にして大根性の所持なりと解するが如きは當を得ざる巧釋と言はねばならぬ。

## 七、聖所愛戒の原語推定

瑜伽論に出づる聖所愛戒なるものは智度論に出づる智所讚戒と對比することによりて聖所愛戒は即ち智所讚戒なるを知るを得る。智所讚戒の原語は巴梨涅槃經文との對照によりて vinūpasattha (智者によりて讚歎せらる) なる故に、聖所愛戒の原語も亦同一に非ざるなきかと考へられる。然し前引の如き諸大乘經論並に阿含經類に於ては不缺・不破・不雜・不濁・不著・自在・智所讚戒等の如くに五種・七種乃至十種の連續型に於て智所讚の戒名を出だしてをるのに、瑜伽論中には一箇處として此の連續型に於ての聖所愛戒の戒名を見るを得ざるは如何なる理由であるか。瑜伽論卷十八(來一八

(三左) には「無缺乃至無雜」の語ある故に、五種戒・七種戒の連續型が無いのではない。夫故にその中に聖所愛戒に相當する語も含まれてゐると見ても差支なきやうにも思はれる。然らば瑜伽論の聖所愛戒なる「語の出據」に見らるゝが如く、不缺・不破・不穿等の連續型を離れて單獨に聖所愛戒の語のみを出だせるは何故であらうか。その連續型の面影の幾分なりとも、聖所愛戒の語の前後に出で來るべきである。或は智度論に於て不缺戒不破戒等の連續型を出しつゝも智所讚戒なる語を特に珍重してをり、遂に一論を通じて四種の智所讚戒を觀取するを得たるが如くに、瑜伽論の聖所愛戒なる語もその連續型を脱化して單獨に聖所愛戒と稱するに至つたのではないかと考へられる。しかし斯かる想像は極めて危険を免れない。加之、十住毘婆沙論(左三・八・五六)には、出家菩薩が般舟三昧を修習するについて所有戒を盡く受持すべきを勸むる一段に於て(1)於レ戒無毀疵、(2)持レ戒不ニ雜行、(3)持レ戒不濁、(4)清淨戒、(5)無損戒、(6)不取戒、(7)不依戒、(8)不得戒、(9)不退戒、(10)持ニ聖所讚戒、(11)持ニ智所稱戒、(12)隨ニ波羅提木叉戒、(13)具ニ足威儀行處、(14)乃至微小罪ニ心大怖畏、(15)淨身口意業、(16)淨命、(17)所有戒盡受持、(18)信ニ樂甚深法、(19)於ニ無所得法ニ心能忍、空無相無願法中心不驚……等とある。此中に於て持聖所讚戒と持智所稱戒との二種を出せるは、これ原語を異にせるの證である。それ故に *vinūpasaiṭṭha* を智所稱戒に相當せしむるは當然であるが、同時に聖所讚戒の原語と見るべきではない。されば瑜伽論の八聖道分の無漏戒を述ぶる所と、智度論の八聖道分の無漏戒を述ぶる所とに於て、一は聖所愛戒とし一は智所讚戒とせるに由り、所明の義理が同一であるからとの理由によりて聖所愛戒と智所讚戒とが其の原語を一にすると考ふるは早計である。この意味に於て聖所愛戒の原語は *vinūpasaiṭṭha* ではないといふべきである。隨うて瑜伽論に無缺乃至無雜等の一連の文ありとも、其中に智所讚戒の語は含まれるとするも、聖所愛戒の語が含

まれてゐると考ふるは誤りである。

茲に於て瑜伽論の聖所愛戒なるものは不缺戒・不破戒等の連續型中に求むべきではなく、自ら別の根據に是を求めなければならぬ。即ち前出の「語の出據」に出せる如く、瑜伽論卷八十三(來五・一)に「於佛・法・僧及自所得聖愛戒以正信二行、如實至誠故」の文に注意せらるべきである。此文は四種證淨として阿含中の諸處に出づるもの、篤く三寶及び聖戒を信することである。而して是の聖戒を聖愛戒又は聖所愛戒と名づけたのである。是事は巴利涅槃經の法鏡說法(第二章第九節 D. 2, p. 94 l. 5)によりて證せられる。

.....Ariya-kantehi silehi samannāgato hoti akhaṇṇehi acciddelhi asabalehi akammāsehi bhujjissehi viññā.  
ppasatthehi aparāmajjehi samādhi-saṇṇvattanikehi.

(……)聖弟子は聖者に愛せられる戒・破壞せざる・斷絶せざる・穢されず・疵點(雜)ならざる・自在なる智者に稱讃せられる・著せざる・三昧に導き轉じ行く(戒)によりて具足せられたり)。

是によりて聖所愛戒なる原語は *ariya-kantagā* であり、又不缺戒・不破戒等の連續型の最初に冠せられる戒名であり、是戒名が智度論等には清淨戒とか聖戒とあるに相應するものであることが知られる。*kanta* は pleasant, lovely, enjoyable の義で愛樂し受用する意なる故に、瑜伽論卷二十九(來二・四〇)に「諸の聖者・賢善・正士の長時に愛樂し欣慕し悅意し、彼れ長夜に此の尸羅に於て深心に愛樂し欣慕し悅意するに由る、故に獲得時を聖所愛と名づく」とある釋意が了解される。即ち聖所愛とは受戒作法により獲得されたる苾芻戒を總稱し、聖弟子達が自所得の其戒を愛樂し欣慕する義である。茲に於て聖所愛戒は自らが愛樂する上から名づけ、智所讚戒は他即ち諸佛・菩薩・辟支佛及び

諸の聲聞衆に稱讃される戒といふ意なることが知られる。夫故に聖所愛戒は不缺・不破等の連續型中に含まるべきものでなく、寧ろ不缺・不破等の根本とも言ふべき總稱の名であり、連續型の戒名は根本たる聖所愛戒の持相・徳用を示したるものであると知るべきである。而して智度論は不缺・不破等の連續型の最終なる智所讃戒を以て諸戒を讃揚し、瑜伽論は是等の連續型の最初なる聖所愛戒を以て諸戒の根本とし、以て瑜伽論全體を貫けるものである。吾人は茲に聖所愛戒と智所讃戒とを以て瑜伽論と智度論等の戒觀を代表せしめうると共に、兩論が不缺・不缺等の連續型たる古型を其儘に相承しつゝ、各莊嚴なる大乘戒觀を建立せるに驚歎せざるを得ないのである。大乘戒の歸結、それは實にこの聖所愛戒又は智所讃戒に盡くるものである。

— 昭和一四・九・一二 —